

東京 2020 オリンピアン・パラリンピアン記録

東京 2020 オリンピアン・パラリンピアン記録 —早川漣—

早 川 漣

【経歴】

- 2003年～2006年 全北体育高等学校
- 2007年～2011年 日本体育大学体育学部体育学科
- 2011年～2014年 長崎県立佐世保商業高等学校
- 2015年～2018年 長崎国際大学
- 2018年～ 株式会社デンソーソリューション（旧デンソーセールス）

【競技歴】

- 2009年 大学4年で日本代表に初選出
- 2012年 ロンドン五輪 団体 3位
- 2017年 上海W杯 個人 3位
アンタルヤW杯 団体 2位
ベルリンW杯 混合 2位
- 2018年 ソルトレークシティW杯 団体 3位
欧州グランプリ 個人 2位、団体 2位
- 2020年 全日本選手権 1位
- 2021年 東京五輪 団体 5位

1. 競技との出会い

競技との出会いは、姉が先にアーチェリーを始めており、私が小学校3年生のときに姉が通っているアーチェリー場に遊びに行ったのが出会いになります。遊びに行ったときに、姉のコーチから「あなたもやってみないか」と誘われ、それがきっかけで私もアーチェリーを始めることになりました。姉からは、「とても厳しいよ」「たいへんだよ」と強く止められました。でも、姉のやっていることを私もやりたいという気持ちが強く、姉の言葉はあまり耳に入ってきませんでした。結局、「姉のやっていることならば私にもできる」とアーチェリーをはじめたことを家族に伝えました。

このようなきっかけでアーチェリーをはじめることになったのですが、姉が言うとおりととても大変でした。練習は毎日、ほとんど休みはありませんでした。学校の部活動として、小学校からアーチェリー部があったので、小学校3年生から部に所属して毎日練習していました。大変ではありましたが、とても良い環境だったと思います。韓国ではアーチェリーが盛んでしたので、最初は部員も10名程いましたが、卒業するときには私の学年では私一人になっていました。姉が言ったとおり厳しく、大変な部活動でしたので、他の部員はみんな辞めてしまいました。このことがたいへんさをあらわしているかと思います。

私の幼少の頃から、体育・スポーツに関してエ

リート教育が行われていました。小学校4年生から授業はそれなりに、アーチェリーの練習を中心とした生活を送っていました。このような生活を送っていたので、アーチェリーで成績を残せなかったりしたときには、将来のことを考えて不安になることもありました。ですが、途中から勉強をがんばるというのも、友人に比べると勉強のスタートが遅くなってしまっていたため、辛抱強くアーチェリーを続けていきました。自分では決して競技成績が十分ではなかったと思っていますが、アーチェリーで中学校、高等学校に進学することができました。

長く続けているアーチェリーですが、韓国にいたときはあまり好きではなく、魅力を感じてはいませんでした。アーチェリーは「毎日やるしかない」といった意識で取り組んでいたもので、好き嫌いでとらえたことはなかったと思います。ですが、日本に来ることになり、日本の競技者と接しているとアーチェリーのことが好きでやっている人が多いことに驚かされました。それほど競技成績が高くない選手でも、アーチェリーのことで深く悩み続けていたときに、どうしてそんなに悩むのに続けているのかと質問したときがありました。その選手からの答えは「好きだからです」の一言でした。このときに受けた衝撃というかショックは忘れられません。アーチェリー競技で「当たらないのに楽しい」という感覚が私にはありませんでした。この体験をきっかけに、何が楽しいのだろうかと考えをめぐらし、少し考え方を変えてみると、チームで、みんなで、仲間アーチェリーをすること自体が楽しかったり、アーチェリーをとおして交流したりすることが楽しいということに気づくことができました。日本に来てからアーチェリーに対する私の考え方が変わったことで、今まで競技を続けてこられたのではないかと思っています。

2. 日体大の思い出

日体大に入学することになったのは、アーチェリーをはじめのきっかけ同様、今回も姉の影響になります。高校3年の時に頑張ってメダルを獲得することができ、その成績で実業団に所属することができましたが、半年ほどで実業団から大学への進学を促されました。ちょうどそのタイミングで日体大にいる姉から、日体大への入学を提案されました。しかし、私はアーチェリーを続ける気持ちが薄れており、アーチェリーを嫌いになりかけていたことを伝えました。すると姉から「日本のアーチェリーは違うよ」と言われたのです。言葉の壁もあり友人もいなかったため、かなり迷いましたが、姉からの勧めもあり入学の決心を固めました。

不安を抱えながら日体大に入学しましたが、とても良い同級生に恵まれたため安心して学生生活を送ることができました。生活や授業、競技面でもまったく苦勞はしませんでした。ただ、入学直後のオリエンテーションで、身長が高いため荏原体育の基準になり、日本語が話せなかったため苦勞したことはありました。集団行動も基準で、なにをやっても基準になるので少しうんざりしました。そのようなときも、チームの仲間が助けてくれたのでとても助かりました。チームのみんながいなければ卒業できなかったと実感しています。

日体大での学生生活はすべてが良い思い出です。あんなに嫌いになりかけていたアーチェリーもチームのみんなのおかげで、そして日体大のおかげで好きになりましたし、競技を続けようという気持ちにもなりました。多くの良い先生や先輩にも恵まれ、日本に行く前の不安はなくなりました。食事の面でも辛い物がないくらいで不自由はなかったです。辛い物もスーパーなどで唐辛子を購入し、自分で作って食べました。

部活動に関しては、とにかく大学でアーチェリーが楽しいと感じられたのが一番です。でも、実は韓国にいたときよりもアーチェリーの点数は

下がってしまいました。大学と実業団では練習量も練習環境も違いますし、仕方のないことですが日本のアーチェリーのレベルが韓国ほどではなかったもので、問題なく取り組むことができました。日本では早い選手でも高校生から始める選手が多いです。最近ようやく小学生や中学生で始める選手が増えてきましたが、韓国は小学校にアーチェリーの部活動があり、アーチェリー場、指導者、道具もあって個人負担がほとんどなく、安心して競技ができる環境が整っています。日本ではすべて自己負担になりますので、この環境の違いが大きいと思います。日本人にはアーチェリーのセンスがあると思っています。だからこそ、環境に恵まれていないのは本当にもったいないと感じています。この体験を通じて、大学時代にアーチェリー競技の環境づくりをしたいという考えが芽生えてきました。

3. オリンピックの感想

大学卒業後からの話になりますが、長崎国体の関係もあって長崎の高校に就職することになりました。そこでも、学生時代に感じた日本のアーチェリー競技の環境改善について考えていました。それは、日体大の先生から私が大きな大会で成績を残したら、環境が大切であるという私の言葉を分かってくれるようになる。そのために、まずはオリンピックで活躍することが大切だとアドバイスをいただきました。実際にオリンピックに出場できたのですが、韓国の選手は3人全員が20年のキャリアで、日本は年下の選手が6年のキャリアでした。やはり環境づくりが大切だと改めて実感し、今まで競技を続けてきました。アーチェリーは国体終了後に一区切りをつけたのですが、その後に東京2020の開催が決まりました。そのタイミングで大学のアーチェリー部の部長から復帰の提案を受けました。そして、東京でのオリンピックならば東京で練習をしたいという希望を語ったときに、デンソーを紹介していただき受け入れていた

いただきました。

東京2020に出場することができましたが、怪我の影響もあって納得のいく成績ではなかったため、もうすでに記憶から消えています。オリンピックに向けて、「もうアーチェリーをやめてもいい」という覚悟で、かなり無理をして体を酷使しました。その結果、ロンドンオリンピックの前から痛めていた肩に負担がかかり、コロナの影響で1年延期になったことも重なり、肩がもたなくなってしまうました。思った成績が出なかったため辛い思いもしましたが、デンソーのみなさんや周りの方々が応援してくださり、引退も考えましたが競技を続ける決意をしました。オリンピックは男子チームが良い成績を残したので、トータルで考えればよかったのではないかと考えています。

4. 今後の目標

日本のアーチェリー競技の環境改善が今後の目標になります。前述したとおり競技開始時期が遅いため、早めるための働きかけを連盟にしてきました。周りの協力もありようやく小学生から始める環境が整い、大会も開催される運びになりました。次の目標は、開始時期を早める働きかけの過程で気づいたことですが、大学卒業後の競技継続の環境整備になります。デンソーに入社したのも会社でチームを作り、大学卒業後も「あの会社のチームに入りたい」という希望や目標を作ることにつながるのではと考えたからです。こういった取り組みが競技を継続することで、今よりも海外で活躍できる可能性が高くなるのではないかと考えています。

なかなか難しいことではありますが、一生懸命各方面にアピールしています。それに加えて、日本でも日体大の山本博先生に代表されるように、アーチェリーは選手生命が長い競技ですので、女子選手が結婚や出産したあとも競技を続けられるような環境を作れたらと考えています。今は、結婚したり子どもができたしたりしたら、競技を辞め

てしまう選手が多いので、とても残念でもったいないなと思っています。私も競技を続けていき、働くママさんたちに希望を与えられたらいいなと頑張っていきたいと思っています。

また、アーチェリーを多くの方々に知っていただく活動もしていきたいと考えています。さまざまな活動をする機会がありますが、その際にもアーチェリーを知らない人が多いなという印象を受けます。そのため、地域に1カ所はアーチェリーを体験できるような場所を作れたら、もう少し認知度が上がっていくのではないかと考えています。これからも、地道に体験できる機会を開催したり、自分の体験を積極的に発信したりするなどして、興味を持っていただくためのPR活動を進めていきます。

5. 日体大生へ一言

大学4年間の思い出は貴重なもので、一生の宝物であると感じています。私自身にとっても大学の4年間で一番楽しい期間になりました。スポーツだけではなく勉強もそうですが、高校までより自分の時間が作れるようになりますので、競技に対しても勉強に対しても遊びに対しても、もっとも一生懸命に打ち込める時期だと実感しています。いろいろなことに対して自由に選択できる4年間ですので、決められたルールの範囲内で、やりたいことに打ち込んでほしいと願っています。





(受理日：2023年4月14日)